

香爐峯の雪 雨海博洋

とかく世の人々は、人間に対しても、物事に対しても、ある色を付けて見たがるものである。たまたま大学教官のスキヤンダルが華々しく週刊誌などに載ると、大学教官の総べてがそのような色で見られる。これは黒か白か善玉か悪玉か、味方が敵かといった画一的なものを見なそうとする国民性の然らしめるところかも知れない。

わが清少納言も世間様から高慢ちきな女とか、自贊型の人間だとかの評価を等しく受けている被害者の一人である。人の目に立つ存在であればあるほどなおのことこういった厳しい扱いを受けなければならぬようだ。その評価の出所が権威ある人とか、影響力の強い人とかであれば、その評価は決定的なものになってしまう。清少納言の場合もいろいろの人々から批判されて

きたのだが、ライバル紫式部の清少納言評が後世の人々の批判の土台になっていることは否定できない。即ち、『紫式部日記』の有名な「清少納言こそ、したり顔にいみじうはべりける人。さばかりさかしらだち、真名書きちらしてはべるほども、よく見れば、まだいとたらぬこと多かり」という記事である。清少納言が偉そうに得意顔をし、利口ぶっているというのである。これは紫式部と清少納言の対照的性格に由来する感情的反撥心と、中宮定子側と上東門院彰子側との立場上の対抗心とが多分に働いて発した紫式部の清少納言批評であつたと思われる。その発言者が『源氏物語』の作者紫式部だけあつて、後の人々の清少納言観に少なからず影響を与えたと考えられる。

『枕草子』の「香爐峯の雪」の話も、そういう清少納言の自慢話の一つとして、その高慢性を語る場合の引き合いによく引出される段である。即ち、雪が見事に降り積つた朝、御格子を上げもせず、炭櫃を囲んで女房たちと物語などしていた時、中宮定子さまがお出ましになられて、白氏文集の一節を用いて「少納言よ、香爐峯の雪いかならむ」と仰せられると、清少納言は突嗟に、前句に続く「簾を撥げて看る」を「御格子あげさせて、御簾を高くあげ」る動作で示したので、中宮は感心なさつてお笑ひになられたというのが周知の話である。これは清少納言が白氏の詩をよく理解し、それを続きの詩句でなく、動作で表わしたところに機知が働いて、中宮のお賞めに預つたとお得意になつて語る自慢話の一つとするのである。果してそのような見方で、この「香爐峯の雪」の段を理解したと言えようか。

清少納言の雪好きは有名であつた。『枕草子』の大序ともいふべき初段からして、「冬はつとめて。雪の降りたるはいふべきにもあらず」と冬の早朝の雪への讚美を投

げ掛けてゐる。また、「降るものは」の段では、心ひかれるものとして、雪を筆頭にあげ、「めでたきもの」の段でも「広き庭に雪の厚く降り敷きたる」景を素晴しいものとしているなど、雪は『枕草子』の中で五十ヶ所にも記載され、作者清少納言の雪への傾倒ぶりを語っている。それは純白なものを気高いものとしてこよなく愛する清少納言の潔癖な性格の表われであろう。中宮さまが職の御曹司に居られた頃、師走の半ば頃に、大雪が降った。中宮さまが雪山を作らせて、その山が何時までもつかなど清少納言と掛け合つて雪を興ぜられたこともあった。

このようなわけで、中宮定子さまも、しんしんと降り積つた早朝の雪を前にして、清少納言への期待も大きかつたわけである。それにもかかわらず雪の美をこよなく愛していた作者を初めとする宮廷女房たちにしては珍らしくも高く降り積つた雪を眺めもやらず、宮の御曹司の格子を下して、炭火にあたりながら四方山話をしていた。いわば「例ならず寒き」にかまけて不精をきめこんだわけである。これが中宮定子に

とつては不満の種であつた。他の女房はいざ知らず、雪の愛好者である清少納言ともあろう者が、雪を見ることもなく無為に過していると思へばなお更のことであつた。

かといつて言葉鋭く格子を上げよなど言へば座が白けてしまうことになる。そこで「少納言よ。香爐峯の雪いかならん」と仰せられたのである。ここには何人かの女房がいた。それにもかかわらず「少納言よ」と名指したのは作者だけが白氏文集十六「香爐峯下新_ト山居」の詩を知つていたと思つての御下問ではない。人人もさることは知り」とあるように、公任の『和漢朗詠集』にも載り、広く知られた詩であつた。とすれば「少納言よ」と名指したのは、お前ほどの者が、この見事な雪も見ずに炭火に手をかざし、女房たちとおしやべりに興じているのはおかしいではないか。雪は如何にして見るべきかの意をこめてのお言葉に違いない。言うならば、中宮定子さまは清少納言をそれとなく優雅になじられたわけである。作者もさる者で、「ああそうだったのか」と気付くと、何等の言訳をするので

もなく、得意の機転を利かして突嗟に「香爐峯雪撥_ツ簾看_ル」を実行に移して、御簾を高々と上げて、「これでございましょう」とお見せしたのであつた。正に上出来であり、これぞ中宮さまのご期待された清少納言であつた。打てば響く快い機知の応酬は、中宮定子と清少納言の間柄なればこそあり得たものであり、この宮にしてこの女房ありといつた感じがする。作者も名譽挽回をし得た。その場にあつた女房たちも「なほ、此の宮の人には、さべきなめり」と述べている。ここで注意しなければならぬことは、作者の機転だけに焦点を合せると今まで説かれてきたように如何にも自慢話になりかねない。しかし、右に述べたように、折角の女房たちの集いを白けさせまいと中宮さまの白氏文集を利用して、それとなく清少納言をたしなめられた優雅な知性と、清少納言の行動をそれと察して満足せられたお人柄を賛美している作者の真意を汲みとらなければならぬ。従つて、「なほ、此の宮の人には、さべきなめり」と女房たちも宮を主とした表現をして清少納言を賞めているのである。『枕草子』の回想段には、中宮定子追憶の賛美談が多いのである。この「香爐峯の雪」の段も中宮

回想の一こまであつた。